

氏名：高橋遥太

所属 学年：地域教育文化学部同学科異文化交流コース 2年

派遣大学：ラトビア大学

派遣期間：8月21日～9月6日（17日間）

・日本語教室

主にラトビア大学の経済学部棟で2:30～4:00の時間帯で初級の授業、4:30～6:00の時間帯で上級の授業をしました。夏休み中ということで大学生だけでなく高校生、社会人の方、日本語をすでに勉強していた方、最近勉強を始めたばかりの方も授業に来てくれました。

<指導内容>

- ・講義形式で文法事項の指導
- ・音源を用意し、ディクテーションをする
- ・漢字の部首について指導
- ・ゲーム形式で会話の練習をする
- ・英語の単語をカタカナで書く
- ・難しい単語や漢字を探し、クイズを作る

各ペアもしくは各個人に一枚の紙を配る。辞書などを用いて日本語の難しい単語、漢字を探してもらい、その単語、漢字を上欄に書き、この単語、漢字はどんな意味なのかを他のペア予測してもらい、その際に選択肢を3つ設け、1つは正しい答えと残りの2つは相手のペアを騙す嘘の選択肢を書く。以下は例である

- 例) 赤道
- 1 This is the name of Japanese food which rice is mixed with red berry.
  - 2 This means equator
  - 3 This means the road which is full of blood.

初級クラスでは最近平仮名が書けるようになったという生徒がほとんどだった。しかし文法を勉強したいという彼らの要望で講義形式で文法を教えた。ただ文法を教えるだけでなく、習った文法を用いて会話をさせてみるということをした。

上級クラスでは学習者のレベルの差もあり、漢字を勉強したい人、文法を勉強したい人がそれぞれいたため一人で全員に教える時には苦勞した。もう一人の日本人学生が来てからはレベル分けをし、漢字を学ぶグループと文法、会話を学ぶグループに分けて、授業を行った。

楽しく、構成がしっかりした授業を出来れば自分も楽しむことができた。教育の楽しさ、難しさもまた感じさせられた。前回来たときよりも圧倒的に英語の力があつたので、うまく教えることが出来たと思います。

#### ・本プログラム4つの目的についての成果

自分自身や日本人としての知覚力という点に関しては、日本語を教えることを通じて改めて考え直すことができたと思う。日本語を学ぶ外国の方と話をしていると感じさせられるのが日本について、自分の住んでいる地域について熟知していないということ。ラトビア人の学生の中には数多く山形に魅力を感じる学生が数多くいた。しかし改めて自分は山形出身であるが、山形のどこを紹介するのか、山形の魅力は何なのかについて考え直すべきだと感じた。

相手や異文化への理解力という点に関しては、2回目の滞在ということで前回は行ったことがない所に行ったり、会ったことがない人と交流することができた。特に印象に残っているのは知人のラトビア人の方に案内してもらった臨時重要発電所であり、戦時にラトビアの電力源である水力発電所が壊された時に備えて、森の中に作られた施設であり、ソ連軍に見つかり、狙撃された歴史を持つ。彼の話によるとほとんどのラトビア人はこの居場所も、ここで起こったことも知らないのだという。大国が小国を支配しようとしていた戦時の歴史についてを学ぶことができた。

臨機応変に創意工夫するという点に関しては日本語授業で日本語を教える際に発揮することが出来たと思っている。学習者のニーズやレベルを考慮しながら、また日本語教授について学びながら授業を構成していくことができた。そして楽しい授業を作り上げるためにゲームやアクティビティ要素を取り入れたり、会話をさせ、学習者、授業者双方が楽しく学習することができる授業を作り上げることが出来た。



#### ・今後の展望

自分は将来英語教員になるつもりであり、英語を用いて日本語を教えるということを通じて英語力と教授力を高めることを主な目的としラトビアをまた選んだのだが、その目的を果たすことが出来たと思っている。今後の展望として、もっともっと英語力を向上させるため留学をするということは大学に入る前から考えていて今は協定校に留学するためのスコアをとる勉強の最中である。このプログラム後、教育実習に行ったのだがそこで感じ

たこととして、英語力は必須であるということ。実習中、ある生徒が「先生はどうしてそんなに英語が話せるんですか。俺も話せるようになりたい。」と話しかけてくれた。英語教員は生徒の手本となり、学習意欲を促進させる存在でなくてはならないと思う。加えて教壇に立った時には生きた英語、使える英語を教えたいと考えているため、もっと力をつけるということが今の自分に必要であると思っている。今回の滞在では自信とともにモチベーションも得ることが出来たため、今後も精進することを続けていきたいと思う。

最後に「学生大使」派遣プログラムを開講してくださった国際交流室の方々、自分の成長を促してくれたラトビアで出会った方々にはとても感謝している。その感謝の気持ちを忘れずに今後へと活かしていきたいと思う。

